

# 草庵仏教

第171号  
(発行日)  
2004年9月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール: kimyou4@yahoo.co.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....
- 〈念仏座談会〉  
第1土曜日午後3時  
第3土曜日午後3時  
\* 8月の〈同朋の会〉及び  
第3土曜日の念仏会は休み。

## 真宗教理問答③ 仏因について

A 「仏教は成仏の教えといわれています。仏になるためにはどうしたらよいのでしょうか」  
D 「仏になるたね(因)がなければなりません」  
A 「仏になる因はどうした得ることができのでしょうか」  
D 「仏になる厳しい修行をしなければなりません。修行が因となって果として仏のサトリが完成する。それが仏になるということです」  
A 「仏になる修行ははなはだ厳しくまた長いと聞いています。私には厳しい修行はとてでもできそうもありません」  
D 「仏になるために因として自ら修行して仏に成ろうとする道を聖道門といいます。ところがこの道は、修行が大変難しいので難行道ともうします。それでこの道で仏なるのは容易ではないのです。ほとんどの人は仏になれなくていつまでも迷いの境界にとどまるしかないのですね」

D 「いいえ、道があるのです。それが往生浄土門です」  
A 「それはどんな法門ですか」  
D 「私どもの力ではみずからの修行によって仏になる因を作ることができないことを哀れみたまひ、一切衆生をへたすけんとおぼしましたちける(歎異鈔) 仏様がまします。それが阿弥陀仏です。阿弥陀仏はご自身のおん力一つによって私たちを仏にしようとしてくださっているのです」  
A 「どのようにして私たちに仏にしようとするのですか」  
D 「阿弥陀仏は、法蔵菩薩となつて私たちが仏になるための因を私たちに代わつてご修行され、それによって仏因を仕上げ、それ(仏因)を与えてくださることによって、私たちに仏にしてくださいのです。私たちの方からいうと、阿弥陀仏から仏になる因をいただくことによつて仏になることができます」

D 「仏説無量寿経には阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩のご修行のすがたを  
不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植して、欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず。色・声・香・味・触・法に着せず。忍力成就して衆苦を計らず。少欲知足にして、染・恚・痴なり。三昧常寂にして、智慧無碍なり。虚偽・詭曲の心あることなし。和顔愛語にして、意を先にして承問す。勇猛精進にして、志願倦むことなし。専ら清白の法を求めて、もつて群生を恵利しき。三宝を恭敬し、師長に奉事す。大莊嚴をもつて衆行を具足し、もろもろの衆生をして功徳を成就せしむ。  
などと説かれています。現代語訳しますと  
(このため、はかり知ることのできない長い年月をかけて、限りない修行に励み菩薩の功徳を積んだのである。  
貪りの心や怒りの心や害を与えようとする心を起さず、また、そういう想いを持ってさえいなかった。すべてのものに執着せず、どのようなことにも耐え忍ぶ力をそなえて、数多くの苦をものともせず、欲は少なく足ることをして、貪り・怒り・愚かさを離れていた。そしていつも三昧に心を落ちつけて、何ものにもさまたげられない智慧を持ち、偽りの心やこびへつらう心

はまったくなかったのである。表情はやわらかく、言葉はやさしく、相手の心を汲み取つてよく受け入れ、雄々しく努め励んで少しもおこたることがなかった。ひたすら清らかな善いことを求めて、すべての人々に利益を与え、仏・法・僧の三宝を敬い、師や年長のものに仕えたのである。その功徳と智慧のもとにさまざまな修行をして、すべての人々に功徳を与えたのである。)  
となりましょう。ここにへもろもろの衆生をして功徳を成就せしむとあります。これは法蔵菩薩が、私たちが仏になる功徳(因)を私たちに代わつて成就してくださったことが明瞭に表わされています」  
A 「阿弥陀仏が私たちのために仏因を仕上げてくださいましたのは私たちに仏因もなければ仏因を仕上げる力がないことを知り

《秋季彼岸永代経法要》

9月22日(水)  
午後2時始まり

\* どなたでもご自由にご参詣ください。

抜いておられるからなのです」  
D 「そんなのです。私たちは貪欲や瞋恚や愚痴の煩惱にふりまわされて地獄に堕ちる因はいくらも作っています、仏になる因は一つもないことを阿弥陀仏は見通されたのです。このことは私たちの反省や内観によって知り得ません。ただ阿弥陀仏が私たちを助けようと立ち上がってください、仏の因をすべて仕上げて下さる大悲のまことを知らせていただくことによつて、私どもに仏因はなく、清淨真実の心のないことを初めて知らされるのです」

\*

A 「阿弥陀仏の慈悲により、また阿弥陀仏のご苦勞によつて、仏になる因（功德）を成就してください。では阿弥陀仏はどのようにしてその仏因を私たちに与えてくださるのでしょうか」  
D 「ご修行によつて仕上げられたこの上ない功德を名号として衆生に与えようとされたとお聞かせ頂いています。ですから、名号は正信偈にも（本願名号正定業）で、本願の名号は正しく浄土に生まれることの定まる業因（たね）であるとおおせられるのです。このように仏徳（仏因）を本願名号としてくださるのです」  
A 「その本願名号を私たちに与えてくださり、それでもって仏にして下さるのですね」

D 「そんなのです。ですから与えて下さる本願の名号を私たちが頂くことが大切です。阿弥陀仏は名号を与えようとし続けておられますが、私たちがそれを受け取らないものをしたくないから、私たちは迷い続けてきたのです。本願の名号を疑い捨ててきたのです」  
A 「私たちはこの本願名号をこぼみ続けて、未だに流転しているのです」  
D 「そうお聞きしています」

\*

A 「ところで本願名号の本願とはどういう意味ですか」  
D 「名号にかけられている阿弥陀仏のお誓いです」  
A 「なぜ仏の誓いが必要なのですか」  
D 「それは、仏の徳が成就している名号を衆生に与えんがためだと思っています」  
A 「名号を万人に与えるために名号に誓いをかけられたのですね。お誓いがかけられなくて、そのまま衆生に名号を与えるわけにはいかないのですか」  
D 「私たちの平常意識は自我ですから、自我の私が仏の功德である名号をつかむと、それをもつて自我の欲望を叶えようとするからではないでしょうか。自我は名号を災難よけや商売繁栄の道具にしかねません」  
A 「先年、台湾にいったとき、（つねに念仏せよ。そうすれば災難はこない）という張り紙を見たことがありません」

ことがありません」

D 「そのようにお念仏が自我の願望達成の手段に使われて、自我否定の道である仏道ではなくなってしまうのです。ですから名号に本願を掛けて、この本願を信受して称えるところに、名号（功德）が人に真に与えられるのだと、そのように私は考えています」  
A 「名号を与えらるるといっても私たちにただ与えさせればよいというようなものではなくて、自我否定の道理を通して与えてくださるのですね」  
D 「そういただいています。さてその本願は  
十方の衆生、至心信樂して、わが国に生れんと欲うて、乃至十念せん。もし生れずは、正覺を取らじ（佛説無量壽經）」  
というお誓いです。この思し召しは、（十方の衆生）とは、すべてのものに喚びかけられるお言葉です。  
（至心信樂して、わが国に生れんと欲うて）とは、本当に疑いなく我が浄土に生まれることができるとおもえとのお心で、中心は（信ぜよ）とおすすめくださる思し召しです。（乃至十念せん。もし生れずは、正覺を取らじ）とは、たとえ十声なりとも名号を称えるものを浄土に生まれしめん、との念仏の誓いです」  
A 「南無阿弥陀仏の名号はたんなる仏の名ではなくして誓いの名なのです」

\*

D 「そうです。そして、この誓いの名号を信受して念仏もうす人は必ず浄土に生まれ仏になるべき身とこの世において定まると仰せられています」  
A 「そうすると（名号をとないものを浄土に生まれしめん）という阿弥陀仏の誓いを信じて念仏申す人がお名号を真にいただいた人なのですか」  
D 「そんなのです。阿弥陀仏が与えてくださる名号をただ口に称えているというだけでは名号を真にいただいたことにはならないのです。卑近な例でいいますと、重病の私に大変親切な医学研究者が長年研究して完成した特効薬を持ってきて、（これを飲めよかならず直るから）とおすすめくださる。私はその薬を手で受け取ったとします。もし、手で受け取っていつまでも飲まないなら、真に薬をいただいたことにはならないですね。それと同じで、阿弥陀仏が善知識をおして、（必ず助けるで名号を称えよ）とお誓いの名号を私たちに与えてくださっても、口にただ称えているだけでは、名号を本當の意味でいただいたとはいえませんが」  
A 「口に念仏している人は多いのですが、ただ称えているだけではまだ仏因としての名号を、手に薬を持っているだけで飲まない人のようなもので、真にいただいたとはいえないのです」

そうすると真にいただくとは」  
D 「それについて親鸞聖人のお手紙には  
弥陀の本願ともうすは、名号をとねえんものをば極樂へむかえんとちかわせたまいたるをふかく信じて、とななるがめでたきことにてそうろうなり。（乃至）一向、名号をとなくとも、信心あさくは、往生しがたくそうろう。」

と仰せられています。称えていても念仏の誓いを信じていることが浅いなら、いまだ仏因をいただいたとはいえず、往生は難しいとお言葉であります。（必ずタスケル、念仏申せ）という誓願を深く信じて、そこに名号が真にいただかれるのです」  
A 「名号にかけられた阿弥陀仏の誓いを信じているところに仏の功德の名号がその人のものとなるのです」  
D 「そんなのです。聖人の『尊号真像銘文』には  
御ちかひの御名を信じてうまれんとおもう人はみなもれず、かの浄土にいたる。」  
とあります。本願の名号を信受した人は浄土に生まれて仏になる仏因をいただいたのですから、かならず（かの浄土にいたる）のです」

A 「真宗で信心が大事だといわれるのは、信心によつて仏因が私のものとなるからすね」

# 歎異抄 第十六章第二講

一切の事に、あしたゆうべに回心して、往生をとげそうろうべくは、ひとのいのちは、いずるいき、いるいきをまたずしておわることなれば、回心もせず、柔和忍辱のおもいにも住せざらんさきにいのちつきなば、撰取不捨の誓願は、むなしくならせおわしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといいて、ころには、さこそ悪人をたすけんという願、不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまわんずれとおもうほどに、願力をうたがい、他力をたのみまいらするところかけて、辺地の生をうけんこと、もつともなげきおもいたまうべきことなり。(歎異抄第6章より)

(語句)

回心——この場合の回心は悪を悔い改めるほどの意味です。

柔和忍辱——おだやかで、しかも忍耐強い。

撰取不捨の誓願——念仏往生の願のことで、万人を平等に撰めとり救うとの阿彌陀仏の誓い。

さこそ——いくら何々といっても。

さすが——そうはいうものの。

おもいうほどに——思うによつて。

辺地——浄土における辺境の地で、浄土のかたほとり。

\*

一生涯、悪をなせばそのつど反省し懺悔し、善を願って生きる。そう生きてこそ浄土に往生できるのだ」という異説をここで唯円房は批判されているので

現代語訳(あらゆることにつけて朝夕に悪い心をあらためてこそ往生することができるというのであれば、人の命は息を吐いてふたたび吸う間もないうちに終わるものですから、心をあらためることもなく、安らかで落ちついた思いになる前に命が終わってしまったなら、すべての人々を撰め取って決して捨てないという阿彌陀仏の誓願は意味のないことになるのでしょうか。

口では本願のはたらきにおまかせいたしますといながら、心の中では、悪人を救おうという本願がどれほど不可思議なものであるといつても、やはり善人だけをお救いになるのだろうと思うから、本願のはたらきを疑い、他力におまかせする心が欠けて、辺地といわれる方便の浄土に往生することになってしまいますので

寿如来会』に

もし衆生あつて、疑悔に随うて善根を積集して、仏智・普遍智・不思議智・無等智・威徳智・広大智を希求せんに、みづからの善根において、信を生ずることあたはず。

とあります。この人は(みづからの善根)にとらわれて、不思議な佛智すなわち弥陀の本願を信じることがいつまでもできないのです。この章で批判されている異説をとなえる人たちは「悪を改め善をす」ことを生涯心がけようとしている人たちですが、「みづからの善根に」とらわれて本願にたいする「信を生ずることあたはず」なのであります。こういう衆生は浄土の辺地に生まれて、仏を見ることもできねば菩薩の利他(他を救う)の活動もできないといわれています。

\*

まとめではあるけれども、自分の善行にとらわれて本願にたいする「信を生ずることができない。こういう姿は現代でも同じです。真宗の教えを聴聞すること

をいやがらず、熱心なのですが、自分の「行い」にのみ目がいつて如来の本願を仰がないのです。念佛寺の聴聞会にずっと通っていた人で非常にまじめな方がいました。行いという点では申し分のない人で、いわゆる「よくできた人」でした。毎月聞法会に出席されていましたが、いつまでたつても如来の大悲に気がつくことがありませんでした。私の師が「倫理や道徳にはまっけている人はなかなかそこからでれない。如来様にあえない」とおっしゃったことがあります。自分の生き方に誠実だから真宗に信順してもよいの

にと思つたのですが、いつまでもできないのです。

なぜなのでしょう。それは真宗は「悪の自分を見限る」というところにおいて如来に出会うので、まじめな自分をたのみにしているかぎり、「我をタノメ」の阿彌陀仏の大悲が響かないのでありましよう。それはまじめであるけれども、そのまじめな自分をたのみにしている。それだけ僣慢であるといえます。

\*

それともう一つは、「善を行い悪を離れる」とそのことは結構なことですが、それにこだわるとは、因果応報的な考えに縛られているともいえます。「善をなせば福が与えられ、悪をなせば禍いもたらされる」という考えが根にある信心は真宗でいう「罪福信」です。

「なぜ人は善を求め、悪をおそれるか」というと、「悪は将来に禍をもたらし、善は将来に福を招く」という、誰しもが心にしみついている心情があります。よく災難にあうと「悪いことをしたバチがあつたのでは、なかるうか」と思うことがあります。「悪いことをするとバチがあたる」という素朴な心情が心に潜んでいます。そうすると「善をなして、悪をさける」ことによつて自分の生活の安全を計ろうとするのです。人生は不安にさらされています。それこそ何が起るか知れない。そんな中で、少しでも災難や不幸を逃れるために、善をなし、悪を避けようとし、福を求め禍を怖れているのです。それは畢竟、弥陀を憑むことによつてではなくて、自らの善行によつて自分の人生を安定させようとする方向ばかりに心が向いているのです。ですからなかなか弥陀に真向きにならず、弥陀を憑む信心が起らないのです。(丁)